

飯高生へ

学校長 角 秀 明

元日に震度7の能登半島地震が起きた。それまでに何度となく大きな地震が起こっていたにも関わらず、それ以上大きな地震は来ないだろうとの希望的観測で高を括っていた。今回とこれまでとの大きな違いは、自身も被災者であることと避難所開設であった。これまでは地震が発生しても自宅から学校までスムーズに移動できたが、今回はいくつものルートが遮断され、トライアンドエラーを繰り返し二日後にようやく学校へ到着した。その道すがらガタガタ道や倒壊した家屋を眺めながらこんな酷いことが身近に起こるのだと失意に沈んだ。また、学校に着くと学校は避難所として大騒動であり、教頭先生や小林先生が市役所の職員さんとともに獅子奮迅しており、この二日間の遅れを挽回しなくてはと感じた。

30年前までは石川県そして能登は災害の少ない場所として知られていた。従って、他所で地震や豪雨災害が起きて私には「気の毒な」と思いこそすれ、どこか人ごとに考えていた。他者の不幸を自分事としてとらえるには「気の毒な」という思いに加え、どのような行動を起こせば良いのだろうか。変わってしまった町の風景を見ながらそして発災以降の日々を思い返し、そんなことを考えた。行き着いた答えは、やはり私たちが多くの方々からありがたい支援を頂いたように、今後、発災した場合は支援物資等を送り届け、できればボランティアに参加することである。もう一つはその災害が自分の身に降りかかったときにどう行動するかを検証し、災害物資を準備することである。これらの行動がなかったことを後悔している。

6月25日から28日にかけて2年生の修学旅行引率で沖縄に行ってきた。沖縄はリゾート感満載の上に戦跡も学ぶことができる地で、本校ではかれこれ10年以上にわたって沖縄を訪問している。沖縄へは4回目の修学旅行引率になるが、今年の2年生も規律を守り、現地の方々にも教員に対しても思いやりのある行動をしていた。こうした姿勢は本校の自慢であり、私の誇りでもある。

二日目の糸数壕では例年「ピンポン球くらいのおにぎりが一日1個しかあたらなかった」や、「女学生が尿尿とその臭いにまみれながら負傷兵のお世話をした」とガイドさんから説明を受けるが、今年は特に一日1個のパンや尿尿とその臭いは体験していたので、自分に置き換えて話を聞くことができた。しかし、沖縄戦ではそのおにぎりに土や血がついていただろうに、終わりの見えない介抱だっただろうに、と考えると我々の体験は沖縄の方々に比べ、まだまだかすり傷程度だったかも知れない。そのことをガイドさんに話すと、「戦争は人間が止めれば済むことだけど、自然災害はおかまいなしですからね」と、返答された。その言葉と発するタイミング、トーンからガイドさんの逞しさと優しさが伝わってきた。

27日の朝はマリン体験であった。年甲斐もなく生徒ともにドラゴンボートとシュノーケリングに行った。そのボート上で自分の被災状況を明るく話す生徒に対し、ガイドさんは「大変な思いをしたはずなのに」と声をかけると、生徒は「笑っとらんと、やっとなんせよ」と答えたことに、逞しさを感じ、もしかしたらこの生徒も前段の私の思いと同じものを抱いていたのかも知れないとふと思った。

本校生徒は大変優しい生徒達であり、この震災を通じて人間的に成長したと思える言動が多く、この体験を糧にしていることが伝わってくる。一方、大切な人や物をなくし、心のダメージの大きさが案じられるため、上手にストレスを発散し、残りの高校生活を楽しんでもらいたいと願っている。